目白大学新聞

第四一号
二〇一六年 八月二〇日

The Mejiro University Journal
No.41
August 20, 2016

編集
目白大学社会学部
〒一六一―八五三九
新宿区中落合四―三―一
TEL
〇三―五九九六―三一三〇

目白大学の近く中井で毎年開催される「染の小道」の催しで妙正寺川に架かる反物

永久保存
目白大学
中井周辺マップ
Extra Edition

Index

2面
特集
染の小道
学生体験記
第2回フォトコンテスト
●「林芙美子記念館」とは？
●新宿生まれ「内藤とうがらし」

3面
●卒業生「福祉で働く」
●孤食を考える「こども食堂」
●単館系映画への情熱
●ライトベルから考える日本文化

4面
●「マレーシア臨地研修」
●学生と記者「2つの顔」
●学生のギャンブル中毒

内閣府特命担当大臣賞を受賞

社会学部社会情報学科3年生の千葉大祐さんと篠田康太さんが、公益社団法人消費者関連専門家会議（ACAP）の第31回2015年ACAP消費者問題に関する「わたしの提言」で、最優秀作「内閣府特命担当大臣賞」を受賞！

ACAPは、1980（昭和55）年に設立された企業や団体のお客様相談部門の責任者・担当者で構成する組織で、消費者・行政・企業相互の信頼の構築に向けて、各種研修、調査、消費者啓発活動などを行っている。「わたしの提言」の募集は31回目となるが、2015年度は、「わたしが考える消費者教育」「減らそう生活のムダ～衣、食、住～」など5つのテーマに関しての提言が募集された。千葉さんと篠田さんは、この中から「私が考える消費者教育」をテーマとし、「『すごろく』で行う金融教育～中高生に向けた講座の検討からの提案～」を提出した。

実は第30回2014年ACAP消費者問題に関する「わたしの提言」募集においても、「学生と連携した消費者教育～大学生が小中高生に実施する金融教育の提案～」と題した提言で、千葉さんが入選作に選ばれている。その際、10代の学生が受賞したのは初めてとのことで、消費者庁長官や審査委員から是非この提案をこれから実践に移し活動して欲しいという励ましを受けた。そこで1年生の時から一緒に消費者問題に関する学習活動を続けてきた篠田さんと二人で、提言を実現するために1年間活動を続け、その経過と成果をまとめたものが今回の提言に至った。

具体的には、消費者教育学生セミナーに参加し、改めて消費者教育の意義や教育手法を学び、中高生への聞き取り調査を行った。これらの結果から、子どもたちが主体的に楽しみながら学ぶことができ、また惹きつけられる内容を盛り込むことが必要であると感じ、クレジットカードを使うことやその仕組みやトラブルの対処法を考える疑似体験を提供できる教材として「すごろくゲーム」を提案した。（提言の詳細はACAPホームページで閲覧可）。

授賞式での千葉大祐さんと篠田康太さん

「すごろくゲーム」を一言で表すと「人生ゲーム」だと千葉さんは指摘する。「大学生になるとクレジットカードを所持するなどして危険性も増し、危機管理能力を養わないといけなくなる。子どものうちからシミュレーションゲームとして分かりやすく、そして楽しく金融の仕組みを知って欲しかった」

また、これらの活躍を通して一番身になったことは、「グループワーク、プレゼンテーション能力」だという。

現在は新しい仲間も得て、「すごろくゲーム」の作成に取り組んでいる。また可能であれば、学園祭などの場を利用して、講座を実施したいと考えているという。二人とも『すごろくゲーム』を通じて地域の子どもたちと交流し、また目白大学の魅力を地域の人たちに伝えていきたい」と語っている。

（編集部）

普通の日常がどれだけ幸せか

学生の熊本大地震体験記

社会学部メディア表現学科1年生、横田一輝さんはこの春、目白大学に入学した。彼の地元の熊本県菊池郡大津町は、自然が豊かで食べ物は美味しく、とても過ごしやすい町だという。その地元で4月震度7を超える地震が2度も観測され大きな被害を与えた。彼はこの大震災を身をもって体験、また復興作業にも参加した。

私は4月14日、大学での講義を終え友人と外で食事をしていた。そこに「緊急地震速報」が店内のテレビに流れた

――「21時26分　熊本地方で地震発生　震度7　M6・5」

目を疑った。震源地は益城（ましき）町、実家のある大津町に近い町だ。まず母親に電話を入れたが、繋がらない。LINEで「大丈夫？」と送ると、すぐに既読になり返事が来た。「怖い。家に入れない」それからすぐに父親とも連絡が取れた。職場にいてなんとか無事だった。

しばらくして母親から写真が送られてきた。10年以上暮らしてきた実家の部屋の中はぐちゃぐちゃだった。食器棚からはグラスや食器が落下し、破片が飛び散っている。本棚は倒れ本が散乱していた。やっと電話がつながった。「まだ大きい余震が起こっているから、今夜はご近所さんと近くの公園で野宿するね」

下宿に帰るとすぐにテレビをつけた。熊本の変わり果てた姿を見ていた私はいてもたってもいられなくなり、翌日の夕方の便で熊本に帰ることを決めた。

21時過ぎに熊本空港に到着、空気がおいしい。この時熊本市内では大きな断水や停電もなくお湯も沸かすことができた。明日からは片付けやボランティアで忙しくなるだろう、そう考えながらすぐに眠りについた。

ドンッと突き上がるような揺れで私は飛び起きた。すぐにガタガタと揺れ出し一気に信じられないほどの大きな揺れに襲われた。外に出なければ、そう考えたが立ち上がれない。布団を頭にかぶり揺れが収まるのを待つしかなかった。本棚、テレビ、食器棚、全てが倒れてくる。揺れはなかなか収まらない。そしてバチンッという音とともに部屋の電気が消えた。その瞬間一気に恐怖が押し寄せてきた。天井が落ちてくるのではないか、自分の命の危機を感じた。ようやく揺れがおさまり、手探りで自分の携帯電話を探した。物が散乱する床を携帯のライトで照らしながら、足場を探して、やっと外に出ることができた。外は深い暗闇に包まれていた。この辺り全体が停電したのだろう。同じマンションの住民も外に出てきていた。皆不安と恐怖、命が無事であることに対する安堵、様々な表情を浮かべていた。また大きな揺れが来る可能性を考えるとマンションに再びもどるのは非常に危険だと判断し、ひとまず近くにある有料パーキングエリアに避難することにした。

そこには近所の家族づれや、老夫婦など着の身着のまま集まってきていた。毛布一枚頭にかぶり、恐怖に身を震わせる80歳くらいのおばあちゃんや、不安な表情を浮かべながら必死に電話をかけている自分と同じ年くらいの女性。そこに再び大きく長い揺れが襲った。震度4くらいであろうか。近くの家から大きくギシギシときしむ音が聞こえた。泣く子供、悲鳴をあげる女性。それから数分おきに余震が来た。そのたびに人々は互いに身を寄せ合った。

私たちは近くにある高校まで歩いて行った。高校に着くと、300人ほどだろうか、高校のグラウンドに避難してきていた。それぞれ毛布を持ち合ったり、テントを張ったりと暖をとりながら朝を迎えた。まさか自分が被災してしまうとは想像もしていなかった。

次の日からボランティア活動を毎日始めた。援助物資の搬送の手伝い、炊き出し、友人宅の修復と引っ越しの手伝いなど毎日約1週間行った。私にとって全てが初めての体験であった。そんな中、はるばる仙台から駆けつけたというサラリーマン男性2人と出会った。

「私たちは東日本大震災の時に、全国の人たちにたくさん助けてもらった。次は俺たちの番だ。恩を返しにきた」そういって大量の物資を持って熊本に応援に来たという。それを聞いた瞬間、私は胸が熱くなった。全国から送られてくる物資のダンボールにはたくさんの暖かいメッセージが書き記されていた。

「負けるな熊本！」

「また奇麗な熊本の景色をみたい」

「みんながついてる！」

現在熊本では、なおも7000人近くの人たちが避難生活を送っている。どんなに時間がかかっても、皆が愛した熊本県を私は取り戻したい。今年夏には帰省し、復興の手伝いをするつもりだ。何不自由ない、ごく普通の日常を送れることがどれだけ幸せでありがたいことか。

熊本県菊池郡大津町近辺で起こった地震による道路被害

めじTV　若者向け選挙PR動画制作

NHKなどに報じられる

社会学部メディア表現学科の西尾ゼミが、さいたま市選挙管理委員会の要請を受け、若者をターゲットとした選挙PR動画を制作した。委員会からは、選挙権が18歳以上に引き下げられたことを受けて、「堅苦しくなく、同世代の若者目線から選挙に行こうと思ってもらえるような動画を作ってほしい」と依頼され、3本のPR動画を制作した。各動画は約5分で、その制作模様はNHK、テレビ埼玉、埼玉新聞などで大きく報じられた。

動画のタイトルは「Level up! あなたも素敵な大人に！」初めて選挙権を持つ一人の高校生が選挙を体験し、投票するとその人のレベルが上がるという分かりやすい構成になっている。大人になったら選挙へ行き、自分の意志できちんと投票すれば、素敵な大人になれるという意味を込めた。第2弾は、「はじめての選挙～投票って意外とカンタン！～」、そして最後の動画は「私たちの願いを託す1票～届けようあなたの声～」（3本の動画はすべてYouTubeにアップされている）

ゼミ生たちはストーリーを考えるうえで、目白大学のキャンパスや渋谷で若者にアンケートを実施し、若者が持っている選挙のイメージなどを調査した。アンケートの結果を参考にしながら打ち合わせを繰り返し、何度も企画を練り直して作り上げられた。制作するだけでなく、西尾ゼミやさいたま市選挙管理委員会のメンバーが出演した。その撮影風景はNHKニュースに2度取り上げられるなど注目を集めた。

プロデューサーを務めた4年生の浅岡瑠衣さんは、制作することによって選挙への認識が深まったという。「私たち自身の中にも選挙に行ったことがない人がいた。だが選挙管理委員会の方から丁寧に説明を受け、選挙に関する知識が足りなかったが動画を作りながら勉強になることが多かった。私たち自身も選挙に行こうと前向きに思うようになった」

浅岡さんによると、今の若者の中には、なぜ投票するのか理解していない人が多く、選挙に対してマイナスイメージを持っている人もいる。選挙管理委員会からはそのような気持ちをプラスに変えることができるような動画を制作したと、高い評価を得たという。

（編集部3年　椿松はるか）

選挙PR動画の制作風景

目白大学新聞

編集長
椿松はるか
石﨑夏未

編集部
鈴木華奈子
田宮なつみ
額川佳奈
岡村直哉
矢島諒一
岩脇寛太
朴 承煥

理想のお屋敷？ 落ち着く空間「林芙美子記念館」

東京新宿区の住宅街に、ひっそりと佇む「林芙美子記念館」。この記念館は、実際に芙美子と夫の緑敏と養子に迎えた泰と芙美子の母のキクと共に暮らしていた家である。1941年の夏に建てられ、8～9年ほど住んでいた。

林芙美子のプロフィール

芙美子は、1903年12月31日、宮田麻太郎、林キクとの間に山口県下関市（自称）で生まれた。幼少期の貧しかった生い立ちからか、庶民の生活を背景に描いた作品を多く残している。中でも一番有名なのが、デビュー作となった「放浪記」（1930）である。この小説は、芙美子自らの日記をもとに放浪生活の体験を書き綴ったものとなっており、映画化、舞台化、ドラマ化もされている。他にも、「浮雲」（1951）、「めし」（1951）もよく知られている代表作だ。1948年には、「晩菊」という作品で女流文学者賞を受賞しており、日本を代表する著名な女流作家である。

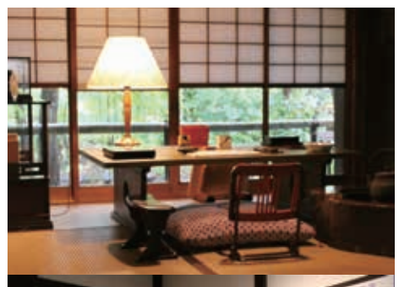
新居造りの決心

芙美子は、1922年に上京してきた。しばらくは、自分の書いていた小説を売り込みに行くなどして多忙な日々を送っていた。そんな中、画家で後に夫となる緑敏と出会い、1930年に現在の記念館がある中井に移り住んだ。元々は、島津製作所のテニスコートだったが、土壌が豊かな土地を購入し、新居を建てることを決心した。ずっと貧しい人生を送ってきた芙美子は、まさか自分が家を建てるとは思っていなかったため、建築についての知識がほとんどなかった。だが、同館のボランティアガイドの西田妙子さんによると、「真面目で努力家で勉強熱心な芙美子は、建築に関する本を約200冊も読んで必死に勉強した」のだという。そうして、芙美子と緑敏の新居造りが始まったのだ。

新居に隠されたこだわり

芙美子は、新居を建てる上で、暮らしやすく、安らぎのある家にするためにさまざまなこだわりや工夫をした。また、京都に自ら足を運び、民家を見たりして家の構造を研究したり、材木を手配するなど、時間と金をかけて造った。そのため建築物の鑑賞が好きな人にはたまらなく、気に入られるらしい。では、どんなこだわりや工夫があるのだろうか。

家を建設した当時は、100㎡、30・25坪までの建坪の制限があったため、主に芙美子が生活する芙美子名義の棟と、緑敏名義のアトリエ棟をそれぞれ建て、つなぎ合わせていた。芙美子が生活していた棟は、全体的に室内が広く見えるように工夫されている。特に、茶の間は六畳なのだが、収納スペースを多くして物が外から見えないようにしたため、実際の寸法よりも広く見えるようにしてある。また、台所はシステムキッチンとなっており、芙美子の身長に合わせた高さに造られている。さらに、これらに加えて強く希望して取り入れたものがある。それは、当時では非常に珍しいと言われている、屋根裏部屋と二段ベッドである。今では、あって当たり前のものだが当時はあまりなく、記念館に足を運んだ人は、ガイドの説明を聞くと、驚きの声が上がるという。また、これらの他にも、家造りをしている中で芙美子と緑敏は「自分たちも何か造りたい」と思い、玄関に敷石を自ら敷いたという。



書斎（上）と展示室（下）

夫の緑敏名義の棟

室内だけでなく、庭にも芙美子のこだわりや好みがつまっている。芙美子の家は、庭がとても広く、たくさんの種類の植物があり、自然がとても豊かで、落ち着く空間となっている。芙美子は植物がとても好きで、中でもザクロとツバキが特に気に入っていた。ザクロは、入口を入ってすぐの、二つの棟の間にあり、浴室から見えるよう目立つところに植えて、いつでも見えるようにした。さらに、家はたくさんの竹に囲まれている。西田さんの話によると、「この多数の竹のおかげで家を火事から守った」という。今でも竹はたくさんあり、運がいいときには筍を見ることができる。他にも紅葉、チューリップ、梅といった四季折々の花を楽しむことができ、都内でもこれだけの種類の植物があるのは珍しいと、花好きの人は気に入るという。

現在の記念館の様子

現在の記念館は、家具が一部変わっているところがいくつかあるのだが、ほとんどが当時の様子と変わらずに大切に保存されている。芙美子は、1951年6月28日に心臓麻痺で47歳という若さで亡くなった。芙美子が亡くなった後も、緑敏は1989年まで暮らしていた。緑敏は芙美子が書いた小説や原稿、日記などを整理し、それらを現在は、アトリエで展示しており、貴重な資料を見ることができる。季節によって家や庭の雰囲気が変わるため、1年を通して楽しむことができ、何度も訪れる人も少なくない。また、ボランティアガイドの説明もとてもわかりやすく、当時の様子がよく伝わる。是非、実際に足を運んで風情ある家を見てほしい。

（編集部3年　椿松はるか）

新宿生まれの「内藤とうがらし」

新宿区内藤町（現・新宿御苑）発祥の内藤とうがらしは、約40ある江戸東京野菜の一つである。江戸時代には、庶民にそば文化と共に親しまれ、新宿近郊の多くの農家で栽培されていたが、明治には都市化の流れの中で姿を消した。しかし、2008年に有志の団体が内藤とうがらしを新宿のブランドとして復活させ、注目を集めている。

現在、多くの人に親しまれている鷹の爪などの唐辛子と違い、八房系である内藤とうがらしの特徴は、芳醇な香りとマイルドで中辛な風味だ。もちろん、一般の唐辛子のように調理して食べることができる。また、少し変わった楽しみ方ができるのも内藤とうがらしの魅力の一つだ。新宿御苑内の「レストランゆりのき」、「カフェはなのき」では、とうがらしをイチゴソースと共にバニラアイスに付け合わせたデザート「内藤とうがらしアイス」や、ケーキの生地に内藤とうがらしの粉末を加えた「長ネギと内藤とうがらしケーキ」といった、内藤とうがらしの香りと旨味を生かしたオリジナルメニューを提供している。

新宿御苑では毎月、周辺地域の江戸東京野菜や内藤とうがらしと同じく、内藤町発祥の内藤かぼちゃの販売会も行っている。インフォメーションセンター前広場では内藤とうがらしの苗が販売されており、これは家庭でも簡単に育てることができる。苗は5月頃に葉、7月頃に青唐辛子、9月～10月頃には赤唐辛子として、半年以上の間楽しむことが可能だ。

内藤とうがらしプロジェクトの代表である成田重行さんは「新宿は市場として栄えてきたために、地域の生産物がない。内藤とうがらしを通し、新宿という地域の産業を盛り上げていきたい」と話す。成田さんを中心としたこのプロジェクトは生産・販売だけでなく、新宿区の企業との商品開発や周辺の教育機関と連携し、文化的普及活動にも力を入れている。昨年はとうがらしサミットといったイベントも開催され、小・高・専門学校・大学の学生による内藤とうがらしに関するプレゼンテーションが行われた。

今年は10月4日（とうがらしの日）に合わせ、10月1日～10日の間「新宿を真っ赤に」を合言葉に、新宿内藤とうがらしフェアが新宿各地で行われる予定だ。このフェアでは、苗や加工品の販売だけでなく、大手飲食店とのコラボも企画されている。この機会に江戸っ子たちに愛された、新宿生まれのスパイスを試してみてはいかがだろうか。

（新宿名物、復活！　内藤とうがらしプロジェクトHP・http://togarashinet.oishiimizu-taishikan.net/）

（編集部3年　石﨑夏未）

内藤とうがらしの苗と販売スタッフ

特集

染の小道 Some No Komichi

東京新宿区にある染め物の街、中井。2009年から毎年2月に開催され、多くの人が足を運び、染め物で妙正寺川が鮮やかに彩られる。
目白大学が毎年主催する「染の小道」第2回フォトコンテスト、編集部が入選作品から選んだ3枚。

「染の小道」体験記

毎年2月末の3日間開催される「染の小道」。中井の町が元々染め物の町だったことがきっかけで開催されるようになった。今回私は染の小道の実行委員会を手伝う学生ボランティアの一員として参加し、直に目白大学のある町の伝統に触れた。

まず、ボランティアとして川のギャラリーの設営に参加した。巻かれている反物を広げ1枚ずつひねらないように川へと吊るしていく。いくつかのグループに別れ実行委員の方々と一緒にやるのだが、これがなかなか大変な作業だ。そんな中、道行く地元の人々が「頑張ってね」「今年も綺麗ね」など声をかけてくれた。地域の人たちも楽しみにしている行事なのだと改めて感じた。作業は40分程で終わり、約300メートルにわたって反物を川に架けた。地域の小学校で制作された物や、大学で制作された物など様々な反物が川を彩る。

ボランティア参加の特典として、着物の無料着付けもしていただいた。これは一般の方も事前に予約すれば、500円で当日用意されている着物と帯の中から自分の好みのものを選ぶことができ、服の上から着付けてもらえる。そのまま当日は返却の時間まで着物姿で染の小道を散策できる。

川のギャラリー以外にも、道のギャラリーがある。中井の商店街に飾られているのれんだ。この計100作品ものれんは一つ一つが違う作家によって作られている。のれんは町中を華やかにし、目を引かれる。色々な場所にあるのれんを目的に町中を歩けばいろんな店にも出会える。この期間町の至る所で出店をしており、飲食店はもちろん個人の家でも出店をしている。甘酒や焼きそばなどの食べ物はもちろん、狐の面や下駄、ビーズアクセサリーなど面白いものがたくさんある。

その中で私は個人の家で出店していた、お茶と和菓子を出す所を訪ねた。茶道の先生にたてていただいたお茶と一緒に出された和菓子はおいしかった。またその横では、とんぼ玉を売っていた。とんぼ玉の値段も手軽で、デザインもとてもかわいらしいものだ。染の小道は川の近くだけでなく、町全体が楽しい。

今年からは千人染めという企画もあった。土・日曜日に落合第五小学校の体育館で開催され、一つの反物に誰でも模様を描ける企画だ。できあがったものは来年の染の小道の川のギャラリーで飾られるそうだ。自分の染めた模様が川に飾られるいい機会なので、興味のある方は是非参加していただきたい。

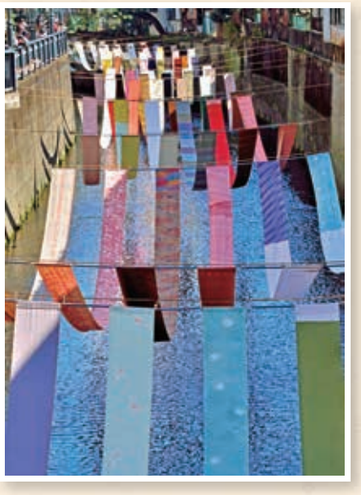
2017年の開催は、2月24日、25日、26日の3日間だ。

（編集部3年　鈴木華奈子）

お茶会を体験する編集部の鈴木さん

染の小道 フォトコンテスト2016 入賞作品

わ～キレイ！ ●太田洋之さん
川面につるされたたくさんの反物を見て、幼稚園児たちは「わ～キレイ！」と歓声を上げて暫しの間見とれていました。



青空に映えて ●小久保敦央さん
先ず山手通りから妙正寺川を見下ろし、「川のギャラリー」全体を把握してから寺斉橋に降りて撮影。青空が川面に映り込んだ美しさと晴天で明暗差が大きいために友禅や小紋の美しさを如何に引き出すかを考えて写しました。

楽しいよ！ ●石原晶子さん
「千人染め」体験をした我が子。
良い顔をしていました。

卒業生からのメッセージ

自分にしかできない福祉を

特定非営利活動法人おおぞら会 大石 徹（人間福祉学科・卒業生）

私は学生時代、人間学部人間福祉学科の第1期生として福祉を学び、社会福祉士資格を取得しました。学部卒業後、同大学大学院心理学研究科現代心理学専攻に進みました。現在は学生時代に福祉や心理を学んだことを活かし、江戸川区・葛飾区内で障がい者福祉サービスを主な業務内容とする「特定非営利活動法人おおぞら会」の管理・運営を行いつつ、現場の一職員として働いています。また、福祉現場で働き、日々浮かんでくる疑問点を解消するために仕事を続けながら、他大学の通信課程で精神保健福祉士資格を取得しました。

そして法人の運営を行っている中で、法律知識の必要性を感じ、初めて民法や行政法等の法律の勉強を始めました。その結果、現在は行政書士試験に合格し、葛飾区内で行政書士事務所を開業しています。

今後、具体的にどのような方向に進みたいかを考えたとき、地域の福祉に対する取り組みや現状に直面します。それは地域で周囲の理解をなかなか得られず困っている障がい者や家族が多く、家族の高齢化や障がい者自身の判断能力の低下により、必要な支援を受けられずに孤独な生活を余儀なくされることなどです。また、精神科病院に何十年と入退院を繰り返しているケースも多く、地域にグループホームサービス等の受け皿がまだまだ不十分であると言わざるを得ません。障がいの有無に関わらず、一人ひとりが地域で安心した生活を送れるようにするために自分にしかできないサービスを作り出していきたいと考えています。

助け合う心の大切さ

そのような私ですが、学生時代はお世辞にも成績が良かったわけではありません。勉強もあまり得意ではありませんでしたので、単位も4年間で何とか取得し、卒業することができたのは、当時所属していた研究室の船越知行教授やゼミ仲間のおかげだと感じています。その後、すぐに就職ではなく大学院に進みましたが、そこでは学部時代とは異なり、周囲の仲間は年上の社会人の方々ばかりでした。

私が進んだ課程はとてもアットホームな環境で所属ゼミ以外の仲間や教授との交流も盛んで、2年間の中で様々な経験をすることができ、自分自身の将来の輪郭をおぼろげながらイメージすることができました。目白大学では、困ったときに助け合う心の大切さ、諦めずに努力を続けていけば結果は後からついてくることを学びました。目白大学に入るまではとてもマイナス思考で、何か新しいことに挑戦することも二の足を踏むばかりでしたが、卒業後はやったことのない何かに挑戦したい、もっと新しいことを学びたいという意欲に駆り立てられるようになりました。

「今」を頑張って欲しい

現在、目白大学で学ばれている学生の中には私が経験したように、見通しの立たない将来に対する不安を抱いている方々も少なからずいるのではないでしょうか。

そのようなときは、一人で抱え込まずに率直な気持ちを周囲の先生や仲間に相談することで、少しずつ解決の糸口が見えてくるのではないかと思います。目白大学は一人ひとりの学生を大事にし、卒業後も何かのときはまた大学に帰りたいなと思える学校です。

これは私個人の意見ですが、卒業後はどこかの会社に就職するだけではなく、自分自身で起業したり、事業を興すこともぜひ選択肢に入れてほしいです。大学生の若い力は、社会にとってとても大きく、無限の可能性を秘めているといっても過言ではありません。きっと失敗することが恐怖につながり、二の足を踏むことが多いのではないかと思いますが、失敗することは当たり前のことです。恥ずかしいことは、他者の失敗を指摘し影であざ笑うことや、失敗を恐れるあまり、他者からの評価を気にして何事にも前向きになれないことだと思います。常に「今」を意識し、努力を続けていけば、きっと大きな目標にも手が届きます。在校生の方々には大学時代の友人や先生とのつながりを大切にし、自分の可能性を信じて、「今」を頑張って欲しいと思います。

単館系映画への情熱

社会学部主催パネルトーク

平成28年度社会学部研究教育懇談会パネルトーク「映像コンテンツの現在と今後」が、7月6日、目白大学新宿キャンパスで開催された。パネルトークに参加したのは映画監督の矢崎仁司さんと、映画プロデューサーの登山理紗さん。両氏は今年春に公開された映画『無伴奏』を監督、製作していることからパネルトークでもこの映画が話題となり、また映像コンテンツ、とりわけ映画を取り巻く環境の変化についても話が及んだ。

その中で両氏が強調したのは単館系映画館の減少と、それに関連して単館系映画製作がさらに厳しくなってきている現状である。単館系映画は製作・宣伝予算も少ないが、「異色の作品が多く、映画表現の多様性を広げるもの」であると登山さんは指摘。大手の映画会社はリスクが少なく、より収益が期待できるコミックスの実写化や、アニメの製作に集中しているという。

パネルトークでの矢崎監督（左）と登山プロデューサー（右）

映画ビジネスを取り巻くもう一つの大きな変化は、インターネットによる配信が盛んになってきているという点だ。「日本人は年平均1回しか映画を劇場で観ない。もっと映画館で映画を観て欲しい」と、登山さん。

パネルトークには100人以上の学生が参加、矢崎監督はいかなるメディアであろうと「誰に伝えたいのか考えれば表現できると思う」と、学生たちにアドバイス。

また登山さんは学生へのアドバイスとして、自分は学生時代アルバイトに家庭教師をしていたが、他の仕事もして色々なコネクションをつくるべきだったと振り返る。「コネは自分でつくるもの」と、単にアルバイトをするのではなく、自分の将来にプラスになるような人間関係をつくる努力をするべきと助言した。

パネルトークの最後に学生からの単独系映画に関する質問に答え、登山さんは宣伝方法としてソーシャルメディアの重要性が高まっていることを指摘。『無伴奏』の宣伝にも画像投稿サイト、インスタグラムを使用し、毎日、自身で更新していると語った。

映画『無伴奏』の原作が直木賞作家の小池真理子さんであることから、新宿図書館では、「小池真理子作品展」を6月13日から7月15日まで開催した。小池さんの代表作が図書館に展示され、また映画『無伴奏』の予告編も観ることができた。

（編集部）

あなたが知らない日本の姿がある

ライトノベルから考える現代日本文化

書店の一角を占める「マンガっぽい装丁の小説」を、あなたは見たことがあるだろうか。作品の多くは文庫本サイズで、角川スニーカー文庫、富士見ファンタジア文庫、電撃文庫といった専門レーベルから刊行されており、表紙に描かれたキャラクターイラストが見る者の目を引く――。これらは「ライトノベル」。若い読者をターゲットとしたエンターテインメント小説だ。

ライトノベルの目立った特徴は他にもある。例えば、「ライト」の名に象徴される平易な文章、マンガやアニメを連想させるキャラクター性に富んだ登場人物、文章とイラストが一体となって展開されていく物語、などが挙げられるだろう。また、作品のジャンルが非常に多彩で、SF、ファンタジー、ミステリー、ホラー、恋愛はもちろん、複数のジャンルを跨いで書かれた作品も少なくない。加えて、毎年開催される公募新人賞により、フレッシュな作品と作家が常に生まれている点は特筆に値しよう。

以上の特徴はすべて、若い読者にウケる面白い作品を追求するなかで培われてきたものだ。そもそもライトノベルには「面白ければ何でもあり」という自由さがあり、様々なジャンルや文化の要素を積極的に摂取しつつ、作品へ反映させてきた歴史がある。そう、この小説はまさしく「エンターテインメントの詰め合わせ」、いわば〝びっくり箱〟なのだ。一見まとまりなく見えるかもしれないが、多面的・複合的な様相こそがライトノベルの真骨頂なのである。

こうした戦略性のもとにライトノベルは若い読者の心を掴み、特に2000年代以降、顕著な商業実績を積み重ねてきた。ここ数年はやや勢いがおさまったものの、2015年の文庫本の新刊点数は年間約2500点にのぼり、市場規模は文庫本市場において2割近いシェアを持つ（参考：『出版月報』2016年3月号）。出版業界内での関心もいまだに高く、依然として関連するトピックに熱い視線が注がれている状況だ。

そのなかで、とりわけ昨今話題を集めているのは、ライトノベルの物語やキャラクターを複数のメディアへ広めていく「メディアミックス」の活発化である。無論、この背景には作品の広告や販売促進といった商業的要因があるわけだが、注目はこのような状況下における読者の動きだ。すなわち、読者はメディアミックスされた作品を楽しむ際、多種多様なメディアを横断しながら物語やキャラクターを受容している。そうした経験を積むなかで、活字メディアにとらわれない読書の姿勢が徐々に確立されていく。例えば、アニメの映像や音声を思い浮かべて小説を読む、マンガやアニメのキャラクターを前提に登場人物を想像する、という風に――。

このようにライトノベルを端緒として、今、現代の物語受容をめぐる様々な変化が起きている。その目まぐるしさはまさに、新たな文化の胎動を感じさせるものだろう。

そしてライトノベルは日本を飛び出し、海外の文化のなかに身を置き始めている。すでに欧米諸国やアジア諸国の一部では翻訳出版が進んでおり、各国の読者へ届けられている。筆者が調査を行ったタイ王国を例とすれば、2016年1月までに千点以上の作品が翻訳出版され、「Light Novel」の名称とともに現地で流通している模様だ。文化、慣習、言語の壁を越え、着々とローカライズ（現地化）を果たしているライトノベル。以前から海外発信が盛んなマンガやアニメを追う形で、今後どのような展開を見せていくのか、その動向が注目される。

現代日本文化の一つとして発展を続けるライトノベルは、私たちにとって新たな知見の宝庫である。その〝最前線〟には、まだあなたが知らない日本の姿があるかもしれない。ぜひ一度、確かめてみてはどうだろうか。

（人間学部子ども学科専任講師 山中智省）

最新動向を論じた批評誌『ライトノベル・フロントライン2』

ライトノベルを研究する山中講師

宇野ゼミ活動報告

孤食について考える「こども食堂」

子どもたちの貧困の実態をご存知でしょうか？ 児童虐待が起きる原因は様々です。その中でも特に取り上げられるのは「貧困」（経済的困難）です。日本の子どもの貧困は6人に1人と言われています（相対的貧困）。貧困家庭の中には、親に経済的な余裕がなく、心の余裕もなくなっていくことで子どもに対して厳しくあたるなどの不適切な養育を行う場合があります。

私たち宇野ゼミは「学生にできる事は何か？」という問いに答えるべく、昨年の桐和祭で、「広げよう、児童虐待防止の輪―目白初より目白発―」をテーマとした学生によるオレンジリボン運動（児童虐待予防啓発活動）を実施しました。啓発対象者を学生と親子（乳幼児）とし、児童虐待に関する展示や人形劇などを実施しました。341名の来場者があり、用意したオレンジリボンはすべて配布できました。来場者へのアンケートからあたたかい応援や共感のメッセージをいただきました。しかし、課題は残されています。

そこで、私たち宇野ゼミ3年生も「目白初から目白発へ」の志を引き継ぎ、学生によるオレンジリボン運動を実施します。ただ、オレンジリボン運動だけを行うわけではありません。近年、社会的に注目されている「子どもの孤食」も取り上げることにしました。子どもの孤食とは親の経済的事情や家庭環境によって、子どもが一人で食事をすることを指します。この孤食により、情緒不安定や体調不良を引き起こす傾向があると言われているため、対策が必要とされています。

この子どもの孤食への対策として「こども食堂」が各地で行われています。「こども食堂」とは、共働きによる両親不在や経済的に厳しくまともに食事を与えられない等、様々な理由や状態にある子どもたちに対して無料、または低価格で食事を提供する場のことです。また、こども食堂では栄養管理は勿論のこと、大人数で食卓を囲む楽しさを子どもたちに知ってもらうという狙いもあります。先にも述べたように児童虐待の原因の一つに子どもの貧困があると言われています。子どもの貧困は食卓（団欒）の剥奪にもつながり、子どもの孤食状態をもたらすと思います。

従って、私たちは「学生によるこども食堂」を実施しようと計画しています。それがココカラプロジェクト『こども食堂』、開店です。～みんなでおいしく！こころに栄養!!～」です。

しかし、「こども食堂」を私たちの手で実施したいとはいえ、現時点では経験もなく運営の仕方も分からない手探り状態です。そこで私たちは、既存のこども食堂を見学させていただき（練馬区・新宿区）、その中でボランティアとして活動させていただきながらこども食堂の詳しい実情を知り、経験を積んでいきたいと考えています。その上で、自分たち学生による独自の「こども食堂」を開きたいと思います。

私たちは夏休みに東京都清瀬市でこども食堂を開催し、そこではフリースペースを開き、子どもたちの遊び相手や勉強を教える活動も行いたいと考えています。1回でも子どもの孤食の機会を減らし、子どもたちにみんなで食べる美味しさや楽しさを教え、心身の安定の獲得を目的として活動していきたい。そして桐和祭でこども食堂に関する展示も行う予定です。その時にはぜひ、ご来場ください。

Twitterで私たちの活動状況をお知らせしております（Twitter ID: @oranger_mejiro）。

また、私たちの活動に協力して下さる方も募集しております。苦しい環境におかれている子どもたちが、少しでも笑顔になれるようにという気持ちからこの計画は動き始めました。ぜひ、応援をよろしくお願いいたします。子どもたちに笑顔を届けましょう！

（人間学部心理カウンセリング学科3年 市川ゆきな・高松沙帆）

●イラスト：飯野沙耶香

去年の桐和祭でのオレンジリボン運動風景

Report

異文化での心の触れ合い

児童教育学科「マレーシア臨地研修」報告

人間学部児童教育学科の14名の学生（現4年生5名・現3年生9名）が、中山博夫教授の引率・指導で、2月28日から12日間、マレーシアのペナンでの臨地研修に取り組んだ。マレーシアで2番目に歴史の古いマレーシア科学大学（国立総合大学）言語学部で英語の特訓を受けたり、現地の小学校、自閉症児教育センター、老人ホーム、ペナン日本人学校等でボランティア活動を行う臨地研修プログラムだった。中山先生にその模様を報告していただいた。

ペナンでは様々な方々と出会い、人の温かさを感じました。感動の連続でした。特に、マレーシア科学大学のバディー（児童教育学科の学生と一緒に活動したボランティア学生）との交流は、学生の心を大きく動かし成長させてくれたと思います。ある参加者の感想文を紹介します。

「この短い期間で強く感じたことは、人の温かさと人との出会いです。マレーシアで出会った一人ひとりが私にとってかけがえのない存在となり、これから出会うたくさんの人との一期一会を心から大切にしようと強く感じることができました。今回の研修で見たこと聞いたこと感じたことを、将来私が教員になったとき子どもたちに伝えていけるよう自分の中にしっかりと落とし込み、糧にしていきたいと思います」

マレーシアの民族ダンス、ジョゲを小学生や先生方、マレーシア科学大学の学生と楽しむ

心を動かす出会い

この学生の心を動かしたものは、マレーシアで出会った数多い方々の心の温かさだったのです。学生と一番長い時間をともにしてくれたのは、マレーシア科学大学のバディーのみなさんでした。

マレーシアは、マレー系民族、中国系民族、インド系民族が混在する国です。マレー系の学校以外に、中国系の学校、インド系の学校もあります。ミンデン・ハイト小学校はマレー系の公立小学校です。児童の多くがマレー系の民族ですが、中国系やインド系の児童も在籍しています。先生方も同じです。マレー系の先生だけではありません。

この小学校で、児童教育学科の学生は折り紙や手遊び、節分などの日本の伝統行事を児童に体験活動を交えて紹介しました。小学生と学生の笑顔が印象的でした。

次に、自閉症児教育センターでの活動の一つを紹介します。子どもたちを対象としたレクリエーション指導を行った時のことです。子どもたちの保護者が後ろで見守っていたのですが、その表情はとても険しいものでした。まるで、「この外国人たちは、いったい何をしにきたのだろう」と、問いただしているように感じられました。

ペナン日本人学校でのレクリエーション指導風景

異文化の人との交流

日本の折り紙を教え、ハンドゲームを行いました。そして、「ドラえもん」の歌と「上を向いて歩こう」を歌ったのです。そのあたりから、保護者の表情がほころんできたのです。きっと、子どもたちの笑顔が、保護者の方々の心をほぐしてくれたのでしょう。最後にハンカチ落としを楽しんだのですが、センターの教室は子どもたちと学生の歓声とがはじけました。保護者も満面の笑みを浮かべていました。そして帰り際には、「今度はいつ来てくれるのか」と話しかけてくれたのです。ほっとするとともに深い充足感を覚えた瞬間でした。

他の参加学生も、次のような感想を述べていました。

「全ての活動がそれぞれに非日常的な体験で、一人で来たら絶対に不可能なことだったので、とても濃かったです。このプログラムに参加できたことに感謝でいっぱいです。ありがとうございました」

「バディーには、『人との出会い』の素晴らしさを教えてもらいました。異文化の人たちでも、ここまで仲良くなれたことが本当に嬉しかったです」

「マレーシアに来て、文化や宗教、人の温かさ、行動や言動の大切さなど、様々なことを学ぶことができました。とても、とても楽しかったです。次、マレーシアに来るときは、英語やマレー語をしっかりと身に付けて戻ってきます」

「来年も、この企画があるとすれば、ぜひ参加させていただきたいと思っています。ありがとうございました」

ミンデン・ハイト小学校の関係者と、マレーシア科学大学学生と一緒に

プロの記者と学生

二つの顔を持つ留学生

目白大学社会学部メディア表現学科3年生で、「目白大学新聞」編集部の朴承煥（パク・スンファン）は、韓国からの留学生であるが、同時に日本のプロ野球の記事を本国に送るプロのスポーツ記者でもある。日本に在住するただ一人の日本野球を専門とする韓国人記者であり、韓国最年少のスポーツ記者であったという。彼にそのユニークな経歴とこれまで経緯を書いてもらった。

日本への留学を夢見るようになったのは両親の勧めで、高校3年生の時から準備し始めました。両親は貿易会社を経営し、日本との取引も多かったので、私に日本に留学し経営学を学ぶように勧めたのです。

私は長男であり、父の事業を受け継ぐことになっていましたが、実は私には他の夢がありました。それは幼い時から好きだった野球に対する夢です。日本への留学もはたしてその夢に向けて大きな助けになるのか疑問を抱いていました。

韓国の大学への進学を諦め、留学を準備していたので日本語の勉強を怠ることはありませんでしたが、野球に対する情熱を放棄することも容易ではなかったのです。そこで思いついたのが野球に関するコラムを書くことです。韓国のNAVER（日本のYAHOOのような韓国人が最も多く利用するサイト）というサイトの個人ブログで野球の試合を分析するコラムを書き始めました。日本語の勉強とコラムを書く仕事を並行し始めたのです。

努力の結果、このブログは1日に平均3000人、最大6万人がアクセスするブログにまで成長し、次第に父の事業を継ぐより野球記者になりたいという夢が大きくなり始めました。両親は反対しましたが、日本留学とスポーツ記者の夢を実現させるために目白大学社会学部メディア表現学科で勉強することを決めました。その夢を後押ししてくれたのは、NAVERが選定する「パワーブロガー」というタイトルを受賞したこと、また、2011年11月スポーツメディアであるOSENに入社し、韓国最年少スポーツ記者として登録されたことです。加えて、14年にはインチョンアジア大会の韓国記者団の一員に選ばれました。

実際に使用したプレスパス

目白大学に入学したのは12年、そのころから本格的に日本野球を勉強し始め、学業と記者生活を並行しながら1年生を終えた後、2年間の兵役義務を終え、15年に目白大学に再入学しました。2年間の軍隊生活のために以前活動していたOSEN社を退社し、15年にHERALDというアメリカに本社があるメディア会社に入社し、日本での記者生活を続けています。

主な仕事は日本で活躍する韓国選手たちに関するニュースを伝えることで、日本ハムファイターズの大谷翔平など韓国で有名な日本選手たちの取材も行っています。明治神宮球場、西武プリンスドーム、東京ドーム、そして遠くはQVCマリンフィールドまで出かけて現場で野球選手をインタビューし、試合を取材。このように一般的な学生が経験できないことを経験し、またただ一人の日本在住韓国人スポーツ記者であることに自負心を感じています。

このようないわば二重生活には長所も短所もあります。長所は、野球選手たちを直接現場で取材できることと、誰よりも早く社会経験を積めるという点です。一方、毎日試合を取材し記事を書かなければならないために個人的な時間を持つのが難しく、日本語の勉強や大学の学業に十分に時間が取れないことがあります。

とはいえ、海外留学生活をしているメリットと特別な留学生活をしていることは短所よりも長所のほうが多いように思います。すでに韓国では日本プロ野球についての専門家として評価されている点もありますが、ここまでの道のりは決して平坦ではありませんでした。まだまだ、至らない点はありますが、こうした特別な留学生生活をしながら感じたことが一つあります。それは他の人たちと同じことをするのではダメだということです。自分だけの特別な何かを探し、そのことによって自らの競争力を高め、社会で生き残るようにしなければならないと考えています。

（編集部3年　朴 承煥）

朴記者と李大浩（イデホ）選手（福岡ソフトバンクホークス当時撮影）

Column

学生コラム

学生のギャンブル中毒とは？

「これから打ちに行こう」この言葉を耳にする学生は多いのではないだろうか。勘のいい学生なら気づいたであろう。「打つ」とはスロット、パチンコを打ちにいくことである。このような会話が漏れ聞こえてきてしまうほど、学生とギャンブルの関係が密接になってきているのが現状である。

日本初のパチンコ（当時の名前は回胴式遊技機）が風俗第7号営業の認可を1964年に受け、ホールに設置された。それから40年余り経った今、パチンコは大人の遊びから、我々学生までに広がり、現在賭け事にハマる学生が増えている。「サークルの先輩に誘われた」「お金がないから」などハマる理由は様々だ。賭けごとをすることに関して私は節度を持って行うならギャンブルを否定するつもりはないが、当然そこには問題も潜んでいる。それはギャンブルにハマり中毒になる人が後を絶たないことである。我々学生は学問に励むことを優先しなければならないはずだ。

ギャンブル依存と学生

なぜ学生はギャンブルにハマってしまうのか。またギャンブル依存にならないようにするためにはどうすればいいのか。

まず、指摘したいことがある。ギャンブル依存は依存症、つまり病気であるということだ。WHO（世界保健機構）からも認められていて、日本国内には500万人以上いるとのデータが出ている。この数字から依存症に陥ってしまった人が非常に多いことが分かる。そこで他の大学などギャンブルをする学生に「どうしてギャンブルをするのか」というアンケートを実施すると、驚くことに一番多かった回答が、「おカネが増えるから」であった。

では本当に儲かるのか、ここがミソになってくる。基本的にギャンブルは続ければ続けるほど負け越す仕組みになっている。ギャンブルはビジネスであり、必ず胴元が勝つようにできているのである。カネが増えると答えた学生の中には、勝てる台、負ける台があるのだと教えてくれ、その地域、その店によってもその違いがあるという。

ただ、どうすれば勝てるか分かっている人も、勝ったり、負けたりを繰り返しているのが現実である。すなわち、勝ったり負けたりすることを繰り返すことでギャンブルへのめりこんでしまうのではないか。それにギャンブルはアルバイトでは容易に得られないような額を稼げるなど、思いがけない収入の期待があるという。

例えば競馬では万馬券と言われるものがあり、1000円が10万円になったりするなど1回のレースで人生が変わってしまうケースがある。このように1回大勝ちしてしまうと、次に負けてもトータルで考えると勝っていると計算してしまい、これがいわば負のサイクルに繋がっていく。

ギャンブルはほどほどに

学生がギャンブル中毒にならないようにするにはどうすればいいのか。

私も競馬場に足を運ぶ程度だが、遊びとして競馬を嗜んでいる。私が競馬場へ行く時に心に留めているのが、「借金をしないこと」である。やはり友達であろうと金を借りる行為をしてしまうと、すでにそれは「依存」ないしは「中毒」なのではないかと考えられる。世間を騒がせたプロ野球の賭博問題、バトミントンの違法カジノ通いと、賭博をめぐるスキャンダルに関係があったのは「借金」である。金を借りれば、もちろん返さなくてはならない。

「お金を返す額＋α」の収入が欲しくなり、そのためには賭ける額が増えてしまうことになるのだ。このことが原因で金を借りてギャンブル通いがやめられなくなってしまい、中毒になってしまう。その日に自分で決めた額で賭けることが、公益ギャンブルを行う上での基本的なルールではないだろうか。

「ギャンブルはほどほどに」という言葉を耳にする。ただほどほどで収まるのであれば、500万人ものギャンブル依存者は日本にはいないはずである。スマートフォン依存、ソーシャルメディア（SNS）依存など、様々な依存症があるが、依存症に陥ると私生活に支障をきたし、それを克服することは並大抵の努力ではできない。

自分の中でしっかりと「金銭感覚」を持ちつつ、それを崩さないで嗜む程度のギャンブルを心がけることが大切ではないだろうか。

（編集部3年　岡村直哉）

東中野

⑬ポレポレ東中野

住所：東京都中野区東中野4-4-1 ポレポレ坐ビル地下
TEL：03-3371-0088
営業時間：10:00頃～22:30頃　※開館時間・閉館時間は上映作品によって異なる
アクセス：JR東中野駅西口北側出口より徒歩1分／地下鉄大江戸線A1出口より徒歩1分
HP：http://www.mmjp.or.jp/pole2/

他の劇場では上映していない
作品に出会える映画館。

⑫THE BAR SMOOTHES

住所：東京都中野区東中野4-4-26 2F
TEL：03-6908-8538
営業時間：20:00～
定休日：月曜日(祝日の場合翌日)
アクセス：東中野ムーンロード内
中央線東中野駅より徒歩5分
HP：http://moonroad.jp/store/store14.html

窓からは、ムーンロードを見下ろしながら、
隠れ家のような雰囲気を味わうことができる。

⑭セルフキッチン オイスター☆マート

住所：東京都中野区東中野4-9-1 第一元太ビルB1F
TEL：03-6279-3232
営業時間：24時間どの時間帯でもご利用可能
(ただし、事前予約制。通常営業は平日17時～23時30分。
土日祝日は12時～23時30分。現在オイスター☆マートも営業中の為、利用時間に変更あり)
アクセス：JR総武線東中野駅東口より徒歩1分
HP：http://www.self-kitchen.com

キッチン付きレンタルスペースでありながら、今年5月からは同スペースで飲食店も営んでいる。
2つの顔を持つこの店のコンセプトは、一貫して安く楽しめる空間作りだ。
レンタルスペースはシェアであれば1人30分で300円程度、貸切り予約も受けつけている。
飲食店の方では、日替わりでブリ刺しやハマグリの酒蒸しなどが100円でいただける
100円祭が開催されている。店主の愛川さん曰く「東中野で1番面白い店にしたい!」とのことだ。

落合南長崎

③ホビーセンターカトー 東京店

住所：東京都新宿区西落合1-24-10
TEL：03-3954-2171
営業時間：平日／ 11:00～20:00
土日祝日／ 10:00～19:00
アクセス：都営大江戸線落合南長崎駅より徒歩約10分
その他の情報：駐車場有
HP：http://www.katomodels.com/hobbycenter/tokyo.php

住宅街に突如現れる赤い車輌が目印。店内に一歩足を踏み入れると、
目の前には巨大ジオラマが…! ジオラマ部品ほか、
鉄道模型各種も取り揃えていて、子供でも安全にジオラマ作成ができる
教室も不定期に開催。お土産には電車モチーフの絆創膏などがおすすめだ。
鉄道ファンから初心者まで、思う存分楽しむことができる。

マンガを通して平成と昭和を繋ぐ。

④豊島区 トキワ荘通りお休み処

住所：東京都豊島区南長崎2-3-2
TEL：03-6674-2518
営業時間：10:00～18:00(最終入館17:30)
休館日：毎週月曜日(祝日の場合は火曜日)
年末年始
アクセス：都営大江戸線落合南長崎駅より
徒歩約15分
その他の情報：入館無料
HP：https://www.toshima-mirai.jp/tokiwaso/

⑤自性院

住所：東京都新宿区西落合1-11-23
TEL：03-3951-4927
アクセス：都営大江戸線
落合南長崎駅より徒歩約6分

歴史の変遷の中に生きてきた猫寺。

中井

①長寿庵

住所：東京都新宿区中落合1-13
TEL：03-3953-3525
営業時間：11:00～15:30 ／ 17:30～20:30
定休日：木曜日
アクセス：西武新宿線中井駅より徒歩3分

東京オリンピックが開催された1964年創業の歴史あるお蕎麦屋だ。
店内に置かれている石臼で挽いて打たれる二八蕎麦は、
爽やかなのどごしで夏にぴったり。店主オススメの天ざる蕎麦をぜひお店で!
一品料理や日本酒、焼酎メニューも豊富なので粋に一杯!というのもオススメ!

②新宿区立 林芙美子記念館

住所：東京都新宿区中井2-20-1
TEL：03-5996-9207
開館時間：10:00～16:30(最終入館 16:00)
休館日：月曜日(月曜日が休日にあたる場合はその翌日)、年末・年始(12月29日～1月3日)
入館料：一般 150円　小・中学生 50円　団体20名以上の場合　一般 80円　小・中学生 30円
アクセス：都営地下鉄大江戸線中井駅より徒歩7分・西武新宿線中井駅より徒歩7分
地下鉄東西線落合駅より徒歩15分
西武バス中井駅より徒歩5分
HP：http://www.regasu-shinjuku.or.jp/rekihaku/fumiko/12/

新宿中井、緑に囲まれた「林芙美子記念館」。『放浪記』『浮雲』といった代表作で有名な作家・林芙美子は、
ここ中井の地で後半生を過ごされた。見所は、芙美子の暮らしていた家が、復元ではなく当初のままの形で残っていること。
さらに、書斎には執筆のために使用していた原稿用紙やインクなどがあり、実際に見て回ることができる。
少し足をのばして、寄り道してはいかがだろうか?

⑥かざみどり

住所：東京都中野区新井5-12-1
TEL：03-3319-0141
営業時間：7:00-19:00
定休日：火曜日
アクセス：西武新宿線新井薬師駅南口より徒歩5分

「新井薬師駅の元気印」明るくおしゃべり上手なお母さん。
リピーターが多く平日休日問わず、毎日客足の途絶えないパン屋だ。

⑦梅照院

住所：東京都中野区新井5-3-5
TEL：03-3386-1355
参詣時間：9:00～17:00
アクセス：西武新宿線新井薬師前駅より徒歩5分
JR中央線中野駅下車(北口)よりバス5分
関東バス「新井薬師前」「北野神社」より徒歩1分
HP：http://www.araiyakushi.or.jp/index.html

中野区の新井薬師に位置した「梅照院」は
都内でも有数の著名寺院である。
「目の薬師」としても信仰される寺院。

⑧PAPABUBBLE

住所：東京都中野区新井1-15-13
TEL：03-5343-1286
営業時間：月～土／ 10:30～21:00
日／ 10:30～19:00
アクセス：西武新宿線新井薬師駅より徒歩10分
中央線より中野駅より徒歩15分
HP：http://www.papabubble.com/

この店は、カラフルで可愛くてポップな飴を販売している。
店一番の売りは、目の前で職人が飴を作り、店で作られた飴だけを販売していることである。
1日に5～6種類の飴を作っている。一番人気な商品は、フルーツミックス。
種類が豊富で様々な味が楽しめる。
店主のこだわりは、「飴のツヤ」を出すことで、一つ一つ丁寧に飴を作っている。

新井薬師

⑪TACCS1179

住所：東京都新宿区上落合1-17-9
TEL：03-3950-5718
アクセス：西武新宿線下落合駅より徒歩2分
HP：http://haikyo.co.jp

様々な劇団が公演を行っている。
公演情報はHPまで。

⑩Cafe KUUSTA

住所：東京都新宿区上落合1-17-8
もみの樹園1F
TEL：03-3945-5001
営業時間：11:30~20:00
定休日：月曜日
アクセス：西武新宿線下落合駅より
徒歩1分
HP：http://kuusta.p-kit.com/

老若男女問わず地元の人々から愛されている、
落ち着きのあるカフェ。

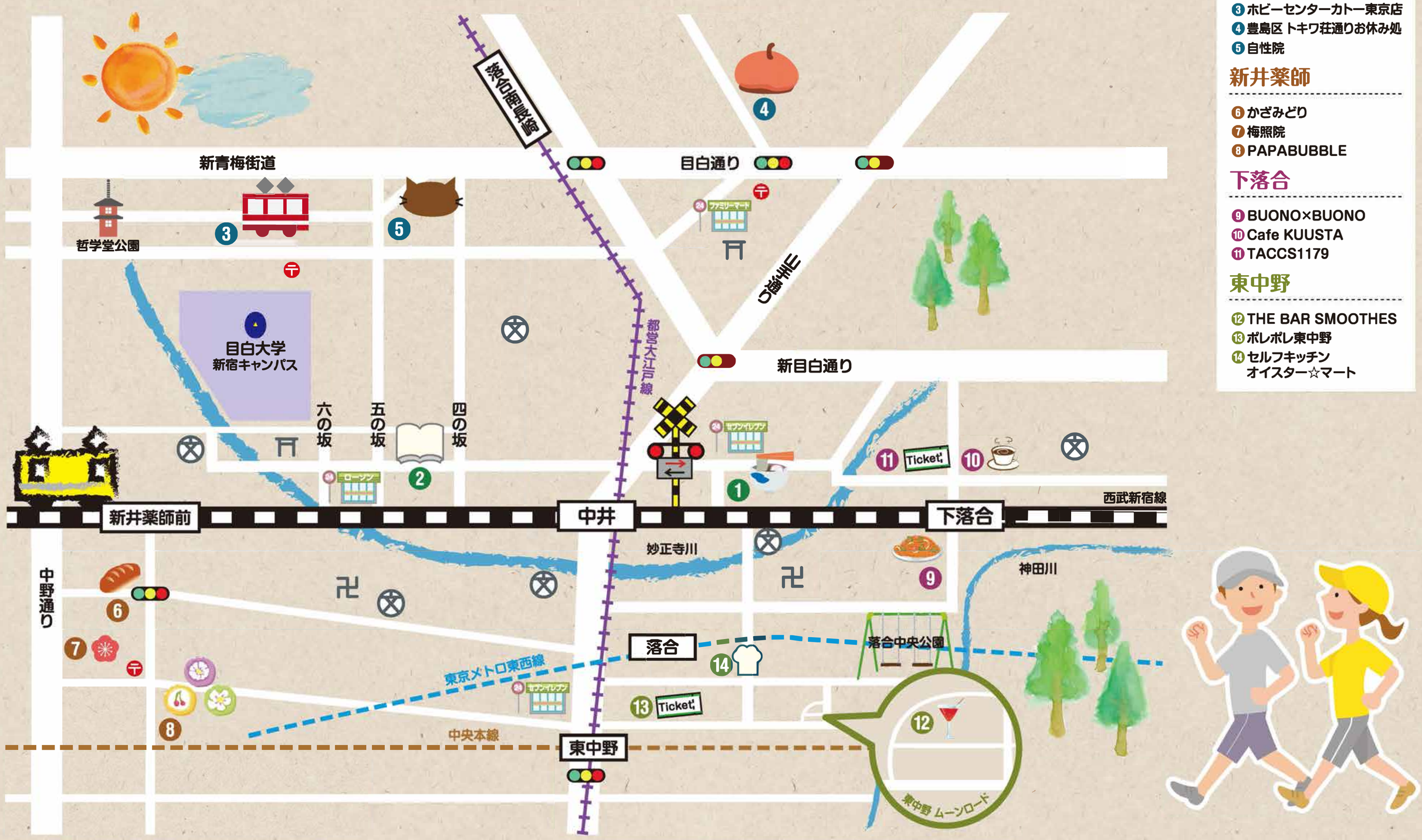
⑨BUONO×BUONO

住所：東京都新宿区上落合1-16-2
クレヨンオチアイ1F
TEL：03-6908-8010
営業時間：Lunch ／ 11:30～15:00
Dinner ／ 18:00～26:00
アクセス：西武新宿線下落合駅より徒歩1分

おしゃれな肉バル。ランチはサラダとドリンク付きで1000円前後で楽しめる。
メニューは日替わりでパスタやタコライス、カレーなど種類も豊富だ。
夜はメニュー内容が大きく変わって黒毛和牛を使った料理やおすすめの肉と一緒に、
カクテルやワインといったバーならではの楽しみ方を味わうことができる。

下落合

中井周辺マップ



中井

1. 長寿庵
2. 新宿区立 林芙美子記念館

落合南長崎

3. ホビーセンターカトー東京店
4. 豊島区 トキワ荘通りお休み処
5. 自性院

新井薬師

6. かざみどり
7. 梅照院
8. PAPABUBBLE

下落合

9. BUONO×BUONO
10. Cafe KUUSTA
11. TACCS1179

東中野

12. THE BAR SMOOTHES
13. ポレポレ東中野
14. セルフキッチン オイスター☆マート